

# ちよっと釣道

[博多湾、剣の舞 タチウオ編]

Vol.20



① 曙の博多湾はまるでテキーラサンライズ ② 銀ギラに輝くタチウオ ③ ヤバすぎる釣れっぷり!これ毎回(笑) ④ タチウオを狩る輩

「北緯33.6度、東経130.3度」…これが表す座標ってどこかご存じでしょうか。

それは博多湾の中心に浮かび、福岡市民にも親しまれている能古島の北端、「也良岬」沖合の座標。ここは北部九州の観光・貿易上の要衝である博多港へ入港する博多湾内の航路の近くでもあります。その航路の部分こそ水深20〜40mくらいに深く落ち込んでいますが、そこ以外の水深は平均15mの極めて浅い海域です。この也良岬沖も水深7〜15m。砂泥が広がり魚の付き場もなにも無いフラットな海底のこの海域は大変なことになってるんです。

私が幼少の頃、博多湾の百道浜や愛宕浜の水際は、ゴミだらけで砂浜は黒く海水はグレーで海水浴など考えられず釣りもする気になれませんでした。ところが海を渡つた能古島は、全く別の美しい海でした。そして1989年に開催されたアジア太平洋博覧会「福岡'89(愛称よかトピア)。その開発を契機に博多湾は生まれ変わりました。

それは地域的で人為的な開発によるものですが、子どもの頃から見ているとそこに生息する魚種の変化に気が付くようになりまし

た。博多湾で四季で見えていくと、その場所に定着して育っていく魚種としてカレイ、アイナメは多かったですが今はほぼ見られませんが。

そして梅雨頃から回遊してくる初夏の風物詩だった青物系のカンパチやシイラも減ったように感じます。そのかわり…タチウオとサワラ、最大体長1mを超え猛猛な肉食性のこの二種が真冬以外、ほぼ周年博多湾沖では釣れるようになりました。

タチウオ、その名の通り太刀にしか見えない銀ギラのこの魚は、東京湾など水深の深いところで釣るのが国内では一般的です。サワラは鱈と書き、それは主に本州で春に旬を迎えることに由来しますがこれは日本海を群れて南から北上していきます。それが一部博多湾内に大量に居つき、ともすれば大衆魚のアジなどよりも釣れたりします。いつのまにか市民の憩いの場、能古島の水際の浅い海域に大量のタチウオが居着き釣れるようになりました。アルミホイルなみに銀ギラのタチウオが群れる海中の光景…夏の日差しが差し込む海中で、眩しい光を反射させる大量の太刀魚の群れ!それは無数の太刀、剣が舞い踊る様と言っても過言ではなくタ

チウオも魚群探知機には写ります。薄い体側のため、少しでも群れの向きが変わると一瞬で探知機の画面から消失すると言います。

盛期にはそれを狙う遊漁船や漁船がその海域にひしめきます。一人平均10尾釣るとして一体どれくらいのタチウオが一日に釣られるのか。タチウオの盛期は、それでも数が減る気配はありません。こんな状況が実は10年ほど前から続いています。釣り方はメタルジグという疑似餌や、テナヤという特殊な針にキビナゴなどの餌を付け水中に落とすシャクって待つだけ(笑)。そんな手軽で簡単な釣り。海で、そして船での釣りをやってみたいという方には正にうつつのチャレンジ。それが姪浜からわずか10分程度の場所です。そのタチウオ、昔からいたかもわかりませんが、ここ数年から集まりだしたのかもしれない。そこに人は及びませんが釣れるのは事実。国内どこを探してもこんなに手軽に釣れるのは能古島沖だけ。大自然の気まぐれで釣れるのは今だけかも。釣りは所詮そんなもんで(笑)。海は変わりゆく。釣りつてそんな瞬間をホントに大切にしたいね。貴方も是非!体感してみてください。